有田磁器・激動の 400 年

講師：大橋康二先生

＊ **中世日本は中国磁器を輸入していた。中国磁器は青磁から染付へ**

青磁（生産の中心は浙江省龍泉窯）の時代から１６世紀には染付（生産の中心は江西省景徳鎮窯）の時代となる。

＊ **日本の磁器の始まり**

400 年前の 1610 年代頃に肥前・有田辺で日本初の磁器が誕生。染付中心に生産が始まる。

国産磁器ができても品質的に優れた景徳鎮磁器を日本の消費者は求めていた。

国産の肥前磁器は中国磁器の供給量を補う形で国内流通。

＊ **有田磁器生産の飛躍的発展。そのきっかけは？**

1644 年、中国の明王朝から清王朝に代わる時に内乱となり、中国磁器の輸出は激減。

国内の磁器需要がすべて肥前に集まる。それに応じて肥前窯は生産量増大の工夫をし、一気に国内磁器市場を独占。

＊ **技術革新（色絵の始まり）**

中国から技術導入し、1647 年頃、有田で色絵焼成に成功。

有田の色絵は海外輸出が始まるとオランダの厳しい注文により変化。

1670 年代には乳白手の完璧な素地ができるようになる。典型的柿右衛門様式の成立。

＊ **1650 年頃に有田で始まった鍋島藩窯は伊万里市大川内山に移転。**

1659 年、輸出時代に入り、将軍の食器である鍋島焼の技術秘密保持のため、1660 年代頃藩窯の移転。

＊ **本格的輸出時代は 1659 年～1757 年の約百年**

輸出総量は約 370 万個以上。

1659 年～1683 年までの中国磁器輸出が激減している時期は、オランダ商社からの注文生産だけでは間に合わず、有田が国内向けに作った高級磁器の中から選んでヨーロッパなどに輸出。

＊ **柿右衛門様式を愛でたイギリス・メアリー女王**
オランダ商社はヨーロッパに運んで売りさばくが、オランダとの関係がよい国に多く流通。

＊ **海外輸出の減退は、中国が国内統一を果たし、1684 年、中国磁器輸出の本格的再開による。**
東南アジア向け輸出品を手掛けていた窯が廃窯

＊ **生き延びるための方策**
国内向けに切り替え、それまで磁器の食器を買えなかった人々のために安価な磁器を作る。
国内向けに新たな器種開発（猪口・丼・火入れ・灰落としなど）

＊ **有田磁器のヨーロッパ輸出の中で大型装飾品の比重高まる**
中国磁器の本格的輸出で、実用食器などの分野は中国に奪回され、有田は色絵や室内装飾品などに力を入れる。

＊ **なぜ輸出時代が終わったのか（1757 年）**
1684 年中国の内乱が収まり、再び中国磁器が世界に輸出されると、たちまち東南アジア市場などは中国に奪回される。
その後はヨーロッパ市場で有田だけが景徳鎮と競争するが価格競争で敗れ、またオランダがイギリスなどに負けて力を失うこと、ヨーロッパで磁器生産が始まることにより、有田磁器の公式輸出は 1757 年で終わる。

＊ **一層、国内市場の開拓に力を入れる。**
安価な製品の開発とともに、茶飲み茶碗などの新たな器種の開発にも力を入れる。

＊ **国内磁器需要の高まりの中で、他地方で磁器生産の試み。**
瀬戸美濃、京焼、九谷（石川県）、砥部（愛媛県）などが成功。

＊ **幕末、1840 年代頃から明治に第 2 次輸出時代**
この時代は有田だけではなく、京焼、瀬戸、九谷、平戸三川内、薩摩なども輸出。

＊ **明治になると、江戸時代までの中国志向から欧米志向に転換。**
ヨーロッパの技術導入と近代化。
共同窯であった大規模登り窯が消える。